

## ミュンヘン大学語学研修の記録

2015/04/02

### ミュンヘン大学語学研修を実施する意義

学生たちは、このミュンヘン大学語学研修から沢山の学びを得た。プログラムの事前学習でシャウマン先生より、事前にドイツ語の基礎を学ぶ、プログラムの中では、安全と危機管理を学んだ。本年は、世界的に不安定な状況がつづき安全を確保する事に力を注いだ。事前学習の中で、ホームステイ先であるミュンヘンの家族にプロフィールを送り出発前よりライフラインを繋いだ。このことにより、ミュンヘン到着後もスムーズに家庭に入ることが出来た。また、ミュンヘン大学側の受け入れ態勢も日本センターの笠井先生を中心に綿密な計画がなされていた。

これらの中に大正生は、プログラムを熟し乍ら、文化、芸術、観劇など一つ一つ体験と経験を繰り返し成長していった。研修に参加することで、広い視野と人間力を身に付けて行った。この研修において、学生たちは幅を広げていった。

もう一つ学生たちは学んできている。社会性―同じ目的を持った学生が7名集まり、協力しながら行動をすること。ホームステイを通して自分思いだけを通しては、何もうまくいかないことをまなび、家族という中で自分を見出すこと。その中で社会適応能力を高めることで自分を成長させることが出来ること。時間を守り、約束事を守り、自主的に行動すること、これは、今の若い人々が最も苦手とすることを、語学研修の集団の中で学ぶ。

ミュンヘン大学語学研修を通して学ぶことはたくさんある。

### 内向化が進む大学の中で

日本の学生に「内向化」が進み、その結果「海外に出ない」「留学は面倒」「わざわざ苦勞するのは」という学生が増加傾向にあることが報告されている。確かに、大正大学においても同様の動きや傾向がここ数年見受けられる。特に男子学生の内向化は顕著になっているように思われる。この主な原因は、他大学でも同じであろうが、大学生活の中で時間的な余裕と金銭的な余裕が持てない学生と言語での障壁が、その原因となっているように推察される。しかし、実際に、現地で見ること、聞くこと、触れることで本物を知ることになります。その結果として、このプログラムには、歴史、伝統、芸術、絵画、音楽が欧州の香りがあり、参加する者の満足度は高くなっていると思う。

本校が実施している「ミュンヘン大学語学研修」では、LMUの学生と交流しながら学んでいくことを大事にしている。

#### この号の内容

語学研修を終えて .....	1
各学生レポート .....	2
研修資料 .....	3
付録 .....	4

#### 重要な日付

01/31	羽田空港に集合でした
02/12	ノインシュバインシュタイン
02/23	思い出の写真



今回、私は3週間程ミュンヘン大学へ語学研修に参加した。ミュンヘンでの生活の中や、観光地において私が感じたこと、発見したこと、考えたことについて報告する。

#### ・ミュンヘンでの生活

観光地へ向かう前の時間や授業が終わったあとなどの空き時間に、私はよくミュンヘンの街を散歩していた。最初のファッシング（謝肉祭）日、早めに家を出てマリエンブラッツェを散歩していたとき、街中に教会の鐘の音が鳴り響いた。大きな鐘の音は四方八方から聞こえ、15分ほど鳴り続けた。このときに私が感じたことは次のことであった。15分間も鐘の音が街中に響き渡るということは、日本では経験したことのない出来事であり、同時に複数の鐘の音が聞こえる状況は新鮮なことに感じられた。音楽の表現概念のひとつに「サウンドスケープ」という言葉があるが、このサウンドスケープとは「音の風景」という意味である。例えるなら、日本において鈴虫の鳴く声が秋の夜を想像させるように、ある特定の音が特定の場所を想起させるのである。私にとって、ミュンヘンの街に鳴り響く教会の鐘の音は新鮮なものに感じられるが、ミュンヘンで暮らす人々にとってはごく普通の日常的な音であるのだと考えると異文化理解に繋がるのではないだろうか。

ホームステイ先では文化の違いを身をもって感じる出来事があった。ミュンヘンに着いて3日、持って来た服が残り1着となったので奥さんに洗濯物を頼もうとしたときであった。奥さんに洗濯をしてほしいと頼むと不思議そうな顔を「洗濯はもちろんするけれど、香水は持っているの?」と言ったのである。私は一瞬、自分の体臭が酷く臭っているのかと思ってヒヤヒヤし、「香水は持ってきていない。臭いますか?」と訪ねた。すると奥さんは、「あなたが臭っているわけではなくて、ヨーロッパでは多くの人々が香水をつけるものなのよ。せっかくドイツに来たのだから明日買ってきてあげる。それと、洗濯は毎日できないわ。水の無駄だし、洗濯物はすぐにダメになってしまうから」と言った。このとき、私はあることに気がついた。ドイツはエコ先進国として有名であり、洗濯の回数を最小限に抑えることによって環境問題に取り組んでいるのである。そして、日本では香水をつけている私と同世代の男性を見かけることはあまりなかったので少し抵抗があったのだが、それから香水をつけてドイツの文化に触れることができた。

ミュンヘン大学の最後の授業では、我々大正大学の留学生とミュンヘン大学の学生、マウ先生、ヘルガー先生、シャウマン先生、笠井先生などで異文化交流会をした。異文化交流会では様々な授業を行ったが、中でも日本の歴史、ドイツの歴史を振り返って、これらの歴史がそれぞれの国の人々の特徴にどのような影響を与えているのかみんなで考えるという内容の授業がとても興味深かった。笠井先生は言語学の立場から考察して次のように述べていた。「日本語では一人称である「私」を用いなくて文章を述べることができる。しかし、ドイツ語を含めたヨーロッパ圏での言語では一人称である「Ich」を用いなければ文章は成り立たない」ということであった。

当たり前のことではあるのだが、ドイツに来てから私がすること、したいこと、したこと、どんな文章であれ必ず、「Ich」の存在は必要であった。日本で暮らしているときは曖昧な表現でお茶を濁すことが多々あった。しかしながら、ドイツにきて「Ich」すなわち「私」の重要性を知ったことにより、日本とドイツの文化の違いを非常によく理解することができたのである。日本で「個」を強調することは避けられ、なるべく当たり障りのない湾曲な表現が好まれるが、ドイツでは曖昧な表現は通用せず、私がどうしたいかははっきりと述べなければならない。このような一見、当たり前のことであり、非常に気付にくい異文化に気がつくことができたのは大きな進歩だといえるだろう。ミュンヘン大学に留学した、これらの私の経験は今後の人生に大きな力になると私は思う。



私は父親が第二次世界大戦時メインのミリタリーオタク、いわゆるミリオタだったことがきっかけで小学校高学年の頃から戦中に日本と同盟関係にあったドイツに興味を抱くようになった。

今回の語学研修プログラムに参加しようと思ったのもこれきっかけで、このプログラムに参加することで、ドイツ語をより深く学ぶとともにこの今のドイツの人々が第二次世界大戦をどのようにとらえているのかを少しでも知る事が出来ればとの思いから応募をした。

実際にドイツに行ってみて、上記の「ドイツ人が第二次世界大戦をどのように思っているのか」に関しては上手く聞くことはできなかったが、ドイツ博物館やシュライスハイムにある航空機を展示しているドイツ博物館の別館、ダッハウの強制収容所跡といった当時の記録を残した史料の実物を直に見る事が出来た。これはこれから先、第二次世界大戦当時の世界各国を軍勢力や科学力と言った点で比較する際に、大きなプラス要素として働くのではないかと思う。また、強制収容所を見学した経験はこれから先、戦争と平和について考えていくうえで大切にしていきたいと思う。

それ以外の点でも今回のプログラムでは多くの事を学び、日本との文化の違いを発見する事が出来た。

例えば、交通機関のシステム。日本で鉄道に乗車する際は、駅と駅の区間距離によって値段が変わる切符を事前に購入して乗車するが、ミュンヘンの場合、ミュンヘンと近郊の鉄道、地下鉄、バス、路面電車を全て同じ会社が運行しているため、定められた区間内であれば定期券、または回数券を購入することでそれらの乗り物が自由に乗れるというシステムだった。

身のまわりの生活に関してはあまり日本と大きな差を感じるようなところはなかった。ホームステイ先のガストファミリーによって違いは出てくるが、自分のお世話になった家ではアメリカなど他の国のように家の中で靴を履いて生活するようなこともなく、風呂がユニットバスだったことを除けば、日本にいた時と大きな差を感じず、その点では苦労することはなかった。

食に関しては、ドイツの郷土料理に関する予備知識がほとんどない状態でこのプログラムに参加したため、カリーブルストやクヌーデル、シュニッツェルといったドイツではポピュラーな料理の存在をドイツで知るといった経験ができたのは新鮮味があった。

そして、日本人のドイツに対するイメージとしてソーセージと共に思い浮かぶものといったらやはりビールだろう。ドイツではビールは十六歳から飲むことが可能で、スーパーに行けばそこだけで数十種類はあろうビールが陳列されている。値段も大体のビールが飲んだ後に瓶を返却したら返ってくるお金(一瓶15セント)を引くと80セント程度で購入できるものばかりである。

そしてこの空瓶や空ペットボトルを返却するシステムも日本では見る事のないものであったから驚いた。ほとんどのスーパーにその瓶やペットボトルを返却するための機会が設置されており、瓶やペットボトルを投入するとその本数に合わせた金額(私のホームステイ先の近くのスーパーでは一本につき15セントだった)が記載されたレシートが出てきて、それをレジで金券として使用(商品を持たずにレジに行き、現金と交換することもできた)できるというシステムだった。ただ、そのせいもあるのか自動販売機やキオスクで買うペットボトルの飲み物やビールはスーパーでうられているものに比べてかなり値段が高くなっていた。

また、今回のプログラムの期間の二週間目がキリスト教の謝肉祭(ファッシング)になっていたため、二度、このパレードに参加した。

この謝肉祭、もともとキリスト教で四季節の断食である大斎の前夜に行われていた祭りが起源で、そのため謝肉祭が終了してからはカトリック信者の人たちは大斎(イエスの受難に心をはせるために行う食事制限、出典Wikipedia)に入っていた。それを表す最も印象的だった出来事が帰国二日前に行われたミュンヘン大学の学生、教員、ガストファミリーの方々と交えてのお別れパーティーの時だった。その日、セルフスタイルで二つのカレーが用意されたのだが、片方がチキンカレーなのに対して、もう片方のカレーはカトリック信者の人に配慮して野菜カレーになっていた。

今回のプログラムを通して、ドイツ語の勉強、ミュンヘン大学の学生たちとの異文化交流等、学校や名所観光など、同じプログラムに参加している人が身のまわりに居る事が多く、「海外にいる」という感覚はあまりなかったものの、三週間以上まともに言葉の通じない家族のもとにホームステイをするという普段できないような体験をする事が出来たのは、自分の将来を考えるうえで非常に大きなプラス要素になったと思う。

今後も今回のプログラムに参加して学んだことを忘れることなく、ドイツに長期留学する目標をかなえられるよう、ドイツ語の勉強に励みたい。



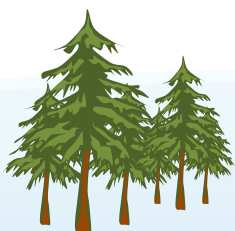


私は、今まで日本から出たことがなかった。そのため、日本という国を客観的に見る機会がなかった。今回の語学研修に参加し、ドイツでの生活の中で文化やシステムに、見たり触れたりすることができ、日本という国を外からしっかりと見ることができ、考えることができた。

初めて海外に出て一番感じたことは、ドイツ人と日本人の考え方の違いである。日本人は人にものを言うとき、直接的な表現を避け間接的な表現を使う傾向にあると思う。なぜならば、日本で直接的な表現を使うと相手に不快な思いをさせてしまうことがある。しかし、ドイツでは間接的な表現は好まれない。はっきりものを言わないと逆に相手を不快にさせてしまう。さらにドイツでは、人と話をしているとき無言の時間がほとんどなく、相手が話していようと関係なく自分の話を続けていたのが印象に残っている。日本ではまず、相手の話を聞くことが重要視される。相手が話している最中に自分が話始めれば、相手に話を聞かないやつだと思われ、さらに興味がないのだと思われてしまう。しかし、ドイツでは相手の話にどんどんかぶせていかないと興味がないのだと思われ、さらに伝えたいこともない人なののだと思われるのだそうだ。そして、ドイツの人たちは初対面の人でもかなり親しげに話をする。電車で隣の座った人や、たまたまお店であった人ともかなり親しげに、活発に話をする。私がお世話になったホストマザーは、お店でたまたまあった人と意気投合し、小一時間話をしていた。さらに、連絡先までも交換していた。よくあることなのだそうです。日本ではあまり見かけない光景にとっても驚いた。人との会話一つとっても文化の違いというものが顕著に表れることに気が付かされた。ドイツの小学校では、日本の一般的なクラスより人数が少ないように思われた。授業中先生が出す質問に対し、全員が積極的に手を挙げて応えようとしていた。自習の時間では、各自で課題を黙々とこなしていた。日本では生徒が、積極的に発言することは少なく、自習の時間に課題に集中して取り組むことは少ないように思う。日本の生徒よりも、ドイツの生徒の方が、自主性が強いように私の目には映った。これらの点は、日本はドイツを見習うべきであると考え、自分の考えることを人に伝えることは、とても重要なことである。自己主張が激しければ、日本で上手くやっていくのが難しいのは事実であるが、日本人はもう少し積極的にならなければならない。そして、自分の考えを正確に、的確に表現する方法を学んでいかなければならないと考える。

次に、ミュンヘン市内の様々な場所や施設等を見学して思ったことを述べる。ミュンヘンの街並みは、日本のようにごちゃごちゃしておらず統一されていて、とてもきれいであった。マクドナルド等のお店も、周りの建物に溶け込むように建てられており、古くからある街並みの外観を壊さないように設計されていた。ミュンヘンの街並みはとてもきれいであったが、道路にはポイ捨てがとても多かった。ごみ箱がいたるところに設置されているが、あまり機能しているとは思えなかった。特にタバコの吸い殻はそこらへんに落ちていた。日本のように、携帯灰皿を持ち歩いている人を私は見なかった。それどころか、ごみ箱があるにもかかわらず、ごみ箱に吸い殻を入れる人すら見なかった。吸った煙草をその辺に投げ捨てるのも文化といわれれば文化なのかもしれないと思った。日本の道路は綺麗だったのだと気付かされた。ミュンヘンには、美術館や博物館が多くある。なかでも、美術館は日本とは大きく違った。ドイツの美術館には、柵がない。そのため、とても近くで見ることができ。さらに、絵画などの作品の写真を撮ることも可能である。日本ではありえないことだったため、とても驚いた。

今回の研修で、日本とはどういう国なのか外から見つけることができた。日本から出たことがなかった時よりも、広い視野を持つことができるようになり、日本と国外の比較ができるようになった。これから、日本人としてどうあるべきかをきちんと考え、自分を見つめなおし生活していきたい。



私は大正大学で第二外国語としてドイツ語を学んでいて、語学研修にあたって事前授業を受けたため、ドイツという国に対するイメージは自分なりに持っていたつもりでした。日本と似ているのは、真面目で仕事熱心なところ。異なっているのは風土に影響される建物や芸術などで、ドイツは日本ととても近い国なのだと思います。けれど、実際ひと月の語学研修を終えて感じたことは、ドイツと日本に共通点はあれども、違う国だということです。「異文化」という言葉の意味を、今回理解できたと思います。

語学力はさておき、日常生活を送る上ではあまり不便を感じることはないと思っていましたが、ドイツに到着したその日に、私は衝撃を受けました。私のホストマザーはひとり暮らしだったのですが、そのせいか洗濯は週に二回、入浴はシャワーのみと伝えられました。考えてみればこちらはお世話をしてもらって、相手の日常に合わせるのが当然ですが、結局最後まで慣れることはありませんでした。水資源の豊富な日本に生まれたからの考えなのかと思いますが、自分の「分かっていたつもり」が恥ずかしいと感じました。

それから、ミュンヘンの街は公共交通機関がとても充実していて、市街地では車と同じかそれ以上にバスやトラムが走っていました。私たちも通学や外出には常に公共交通機関を利用していましたが、日本のルールとは異なるところがたくさんありました。日本ではあまり好ましくない携帯電話での通話や食事は普通のこと、サッカー観戦に向かう電車では、お酒を呑んでいる人も見かけました。かと思えば、ベビーカーを押している人がいても、それを嫌がる人は見かけませんでした。それはドイツ含めヨーロッパの人たちのパーソナルスペースが広いためではないかと思います。

反対に、ペットの犬と一緒に乗り込む人々をたくさん見かけました。ドイツでは公共交通機関はもちろんのこと、デパートにも入店が許可されているそうです。犬税というものがあり、飼うには税金を払わなくてはならず、更に衝動買いをお金目的の繁殖を防ぐために、ペットショップなどで生きた犬を販売することも禁じられていて、犬がほしい人は犬協会などに問い合わせをして、予約をして、生まれてから買うことになっています。そして充分な飼育スペースがあることや、飼い主との交流やしつけをすることを義務づけられているので、電車内で吠えたりすることもないのです。ドイツと日本では、動物を飼うことへの責任の自覚に差があると思いました。

イメージそのものだと感じたこともありました。ドイツの人たちは仕事熱心だということです。早朝に目が覚めると、まだ薄暗い中、除雪車が走っていました。バスもほとんど時間通りに運行していて、観光地の職員もとても丁寧な対応してくれました。お店の営業日や営業時間は閉店法という法律で決まっているようで、日曜日にはほとんどお店は営業していませんでした。そして、仕事をしている間は真面目だけれど、カーニバルなどの行事の際には、音楽とダンスをして、昼間にビールを呑んで、仕事と休日のメリハリがついていて、時間の使い方が上手だと感じました。

ドイツで生活していて印象的だったのが、電車やバス、レストランやビアホールで、初対面の人たちが会話をしているところでした。会話の内容はあまり分からなかったけれど、楽しそうで、日本では滅多に見かけないその光景から、ドイツ人はとても積極的に社交的なのだと思いました。

研修の終盤に、インターカルチャーという授業を受けました。異文化を学ぶ授業でした。先生やミュンヘン大学で日本語を学んでいる学生たちと一緒に、それぞれの母国の特徴を書き出して、それを比べました。ドイツ側では積極性やプラスに関わる言葉が出たのに対し、日本側では協調性やネガティブに関わる言葉が出ました。二国は似ていると考えていたのに、まるで正反対な結果だったため、とても不思議に思いました。その後の話し合いで、日本では場の空気を読むことや恥じらいというものがありますが、ドイツを含むヨーロッパでは、自分の意見をはっきり伝えることが大切とされるため、何も考えていないように見えてしまうこと。けれど我を通すせいで相手とぶつかることもあるため、日本の思いやりなどは見習うところがあること。それぞれの長所を尊重し、短所を補えばいいのではないかという結論になりました。互いの良さを認め合うのと同時に、自分たちのことを見直すきっかけになりました。

私が語学研修で一番印象に残っていることは、小学校訪問です。ドイツの一般的な小学校を訪ねて、自分の中にある「教育」を改めて考えさせられました。

小学校に到着した頃はちょうど生徒の登校時間でもあり、たくさんの好奇の視線を浴びました。三つのクラスを回り、折り紙をしたり、生徒の名前を漢字で書いたりしました。そして、授業を見学してもらいました。歌を歌っているクラスもあれば、生徒が絵を描いたり計算の勉強をしたりと、好きなことをさせているクラスもありました。私たちが休憩しているときは同じく休憩の時間で、中庭で元気に遊ぶ姿を見ました。小学校はたいてい授業は午前中のみで、給食もないそうです。全体的に日本と比べてのびのびしていると感じました。

ドイツの小学校は普通、六歳から四年間通います。そしてその後は職業訓練を主な目的とする基幹学校と実科学校、そして高等教育を受けるためのギムナジウムのいずれかに進みます。基本的に、ギムナジウム以外からの大学進学は難しいと言われていました。小学校卒業の十二歳に将来を決めなければならない、あるいは決められてしまうこの制度は現在改革する動きがあるそうですが、ギムナジウムの卒業試験に合格すればどの大学にも入学可能な制度は、学びたい分野に自由に進めるという利点があり、日本の大学受験を変える参考になればいいと思いました。

ドイツへ語学研修に行ったことで、ドイツ語の力をつけることができたのはもちろん、尊敬できる文化に触れることができました。また、自分の視野の狭さを実感し、海外という外側から日本という国がどういう存在であるのか確認させられました。この経験を忘れずに残りの大学生活、そして社会に出てからも頑張りたいと思いました。



日本人とドイツ人は勤勉でとても似ている民族である、という言葉は何度か耳にしたことがある。確かに日本もドイツも第二次世界大戦に敗戦し、その後の占領統治や国際情勢においても似ている点は多くある。しかし、古くから培ってきた文化というものは気候も地形も違う二つの国を比べてみると同じであるとは想定し難い。そこで日本とドイツの文化の違いを3つに分類しながら比較してみたいと思う。

まず初めに「他人における信頼性」という視点から比較をしたい。日本は島国であり武器などの所有を国内では認めていない。これにより古くより他人対し信頼を置きやすいように思われる。このことは公共機関など他人がいる場所で寝てしまうことなどからも裏付けできる。また日本は島国であるため民族としての和を重んじ、そこから集団意識(群集心理ともいう)が生まれた。個よりも多を重んじる、という考えから「皆がやらないことは自分もやらない」という姿勢が美徳である、と教え込まれてきた。それを法律と相まって考えることから日本は世界に比べて犯罪発生率が遥かに少ないことは明らかだろう。それに対しドイツを含む内陸国は国境を越えて他の民族も移動が出来る。また武器の所有を認めることが多いことから他人に対し警戒から入る。しかしそれは初対面の人に対して失礼に当たるため、私はあなたの仲間であるという意を示す為にフレンドリーに接する。これは和を守ろう、とする考え方に一見近いように思われるが、敵と見なされ攻撃を受けないようにする一種の自己防衛であると考え。このためドイツでは自己主張をすることは大きく評価されている。

日本は和を重んじ、意見の多い方に流されるのに対し、ドイツでは自己に重きをおく。このことはそれぞれの国での生活でも言い換えることが出来る。例えば日本の鉄道では利用者が多い鉄道はほとんどが停車駅に着くと利用者に関係なくドアを開ける。これは売り手(鉄道)から買い手(乗客)への配慮とともに、自己主張を苦手とする民族への配慮であると考えられる。それに対しドイツでは鉄道やバスなどの公共機関では停車駅に着くなり降りる客が自発的に降りる仕組みである。これは買い手(乗客)の自己主張を尊重するとともに暖房効果の効率を高める等の合理性に重きを置いた仕組みであると言える。

次に「第二次世界大戦後の占領下の国」という視点から比較をしたい。

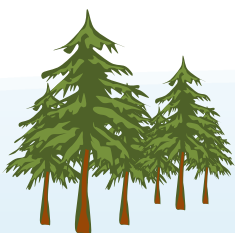
日本は第二次世界大戦に敗戦後、や国内政治や財政など、全てをアメリカに統治された為、現在使用されているマナーもアメリカのものが多く。それに対しドイツでは敗戦後、欧州諸国の監視下にありながらも独自の力で統治を行った為、文化に大きな違いがある。例えば日本(主にアメリカ)では食事で満腹を示す際には、フォークとナイフを皿の中央に交差させて置き、空腹を示す際にはフォークとナイフを皿の右下に揃えて置くが、ドイツでは真逆であり、満腹を示す際にはフォークとナイフを皿の右下に揃えて置き、空腹を示す際にはフォークとナイフを皿の中央に交差させて置く。これは戦後、それぞれの国の統治をどのように行ったかが強く影響していることが分かる。

最後に「風土的観点」という視点から比較をしたい。日本は島国であり周りが海に囲まれているとともに、山脈が中心であり国土が狭く、大陸プレートの上に位置しているため、他の民族よりも民族結合の意識が高く、地震などの災害から身を守るために他者との協力が不可欠であると考えられる。そのため他者との関係性を築こうとする傾向がみられる。

例えば、東北地方に降る雪かきにボランティア団体を派遣する、隣人に「おすそわけ」をする、という活動が日頃から行われている。これは「情けは人の為ならず」の精神の下で行われる活動であるとともに他者との関係を構築するものであると考えられる。それに対してドイツは、自己を重んじる姿勢が強く、個人個人がしっかりと仕事をしていれば問題がない、という傾向がある。そのため、雪かきは自分の家の前をしっかりと行い、自分の家の前以外の道などは手を付けない。また日本のような食品サンプルや優先席なども設けられていない(食に対する日本への意識が世界的にも高いため一概には言えないが)。短時間で、効率よく仕事を行うための合理的な考え方であることは間違いない。

以上3つの観点から日本とドイツの文化の比較を行ってきた。ドイツで多くの人と交流をする際に、相手の話を受け身となって聞いてしまうことや、自分の話を出来ず、相手のペースに飲み込まれてしまい戸惑ってしまうなどの問題が多発した。日本人は「間」で空気を読みがちであるが、ドイツ人にとって、会話をしている際に沈黙が生まれてしまうことは相手が自分に対して興味がない、と感じる事を知った。そのため日本人との会話の際には自分が話を盛り上げなければならないという使命感に駆られてしまうことのであった。

そこで初めて文化の壁を感じたが、自分の中にも無意識のうちに日本で過ごすときと同じように生活をしていけば問題はないのではないか、という思いが存在していたことに初めて気が付いた。また話を聞いていく内に、ドイツ人も日本での生活をする際に、駅のホームで並んで乗車することに驚いたり、「たぶん」といった抽象的な表現に慣れず、意図を読み解くために苦勞をしたなどの体験をしていたことが分かった。「文化の違い」は感じるものではなく生活をしていくうえで気づいていくものだと思う。日本人でも十人十色の性格や考え方があるようにどの民族においても、世界的に民族としていくらか似ていても、その事実は変わらない。大切なことは民族という壁を越え、相手も自分も同じ人間であると考えつつ、相手の生活をしてきた根底を考えながら付き合っていくことである。「郷に入っては、郷に従え。」という言葉があるように自国の誇りを持ちつつ、固定観念を払拭し、他国の人間と国境を越え関係を築いていくことを今後の人生に生かしていきたいと強く実感させられた。





私はドイツでの1か月を通じてドイツ人やドイツの文化に触れ、ドイツと日本の同じ部分も違う部分も沢山見つけることができた。そして、どちらの国も素晴らしい部分と問題点の両方があり、それを含めて日本、ドイツの両国をより好きになることができた。

今回の語学研修の前半、まだ始まって日が浅い頃に私がドイツに対して抱いた印象は、実はあまり良いものでは無かった。実際にドイツに行く前に私が持っていたドイツの印象は、絵本の様な綺麗な街並みや、多くの芸術家や偉人のイメージだった。特に、私が大学で専攻している哲学に関しては、私の好きな哲学者が多く住んでいる国であり、それが語学研修に参加するきっかけの一つでもあった。ドイツは日本よりも洗練されていて、そこで暮らしている人々も素晴らしいのだという思い込みがあった。しかし、実際にドイツに渡ってから、建造物にある沢山の落書きや、喫煙者や浮浪者の多さなど、あまり良くない部分がまず目についた。ドイツ人は合理的であるという印象も、実際にはあまり日本人と変わらないように感じた。ドイツに渡ってから何日かは自分の持っていたドイツのイメージと現実との違いにがっかりすることが多かった。

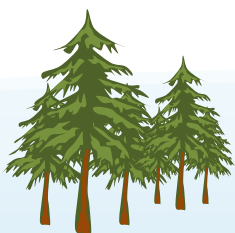
しかし、ドイツでの生活に慣れるにつれ、次第にドイツの良さが見えてくるようになった。まず、ドイツ人はとても親切な人が多いことが分かった。特に、バスや電車などの交通機関の使い方で困ったときに、良くドイツ人に手助けされた。日本人よりも体格が良い上に、日本人より愛想笑いもしないドイツ人は一見怖そうな印象であるが、話してみると意外と良い人たちであることが分かった。また、生活している中で日本とは違って驚いたことは、ドイツ人は知らない人同士でよく会話するという事実だった。私がホストファミリーとバス停でバスを待っている時、ホストファミリーはよくその場にいる人と会話していた。ホストファミリーは私が迷わないように、電車で私の行く駅と同じ駅に行く人に声を掛け、その人たちに目的地まで一緒に付き添ってもらったこともあった。一緒に語学研修に参加した人達のホストファミリーも、見ず知らずの関係の人と良く会話しているらしいという話も聞いた。日本では、知らない人同士で会話することはあまりないので、この光景はとても新鮮に思えた。また、ドイツ人は相手がきちんと理解するまで根気強く説明する人が多いことも日本人との違いであると思った。私のホストファミリーもそうであったが、私は特にミュンヘン大学での歓迎パーティーで、ドイツ人の学生たちと会話した時にこのことを強く感じた。私がドイツ語の辞書で「店」の名詞を調べた時、「das Geschäft」と「der Laden」の2つの単語が出てきたので、この2つの微妙な違いについてミュンヘン大学の学生に説明してもらった。その時に、私が大雑把にしか理解できなかった為に、何度も何度も説明してくれ、それだけで何分間も経ってしまったということがあった。ドイツ人は、相手がきちんと理解し納得するまで、細かい部分にも拘って説明してくれる人が多く、これがドイツ人的な親切さであるとも思った。

短い語学研修の中で、文化の違いに戸惑ったこともあった。何より一番大変だったのは、食事の量の多さだった。肉やジャガイモが中心でボリュームの多い料理である上、量が日本の倍以上近くあったので、食べきれない事も多かった。ビールを初め、お酒の量も多かった。ドイツ人はその大量のお酒を水の様な感覚で飲むので、私も真似して飲んでみたところ、人生で初めての二日酔いを経験した。水も炭酸入りが一般的なもので、普通の水を手に入れるのが意外と難しかった。他には、日曜日にレストラン以外のほとんどのお店が閉まってしまうのが大変だった。日曜日にペットボトルの水が買いたくなって駅前に行っても、スーパーなどほとんどの店が閉まっていて結局買えなかったこともあった。また、シャワーを使う時間もホストファミリーは朝が多く、夜にシャワーを使うのが申し訳なく思えたこともあった。

語学留学に参加し、私がドイツに対してそれまで持っていた印象と変わった部分は、日本との違いはあるものの、ドイツにも普通の人たちが生活し、普通の生活があるということだった。ドイツに対する期待が大きすぎたために、初めはその良くない面が強く見えたが、次第にその良い面に気付くことができるようになった。初めに抱いていたものとは違うドイツの良さが分かり、実習が終わる頃には、日本に戻るのが惜しくなる程にはミュンヘンの街を気に入ってしまった。ドイツ人も日本人も、その表現の仕方が違うだけで、同じように良い部分も悪い部分もあるということが分かったことは、この語学研修で得たものの一つであると思う。言われてみれば当然のことであるが、私はドイツに行く前、その事本当には理解していなかったと思う。今世界では民族や人種や文化の違いによる摩擦や対立がますます根深くなっているが、これは、悪い意味で国同士の違いが意識されることがその原因の一つであるのではないかと私は考える。良い意味で日本とは違うと思っていた私の場合も、根本的にはそれと同じであると思う。国同士には同じ部分も、違う部分も存在し、皆少し違うけれど同じ人間や生活があるのだということを多くの人たちが理解することは大切であると思う。私はドイツ語で4年間ドイツ語の授業を履修し、初めの頃から留学にも興味があったが、なかなか参加に踏み出せなかった。けれど、大学最後の年にこの語学研修に参加して本当に良かったと思う。私はこの研修から、語学力だけに留まらず、色々なことを学び、考えることができた。また、この研修を通して、ドイツの現実についてもっと知りたいとも思った。4月からは社会人であるが、いつかお金を貯めて、今度はもっと長期でドイツに留学したいとも思っている。



今回私はこの研修でドイツと日本の相違点、類似点いくつかを感じた。まず一つ目は文化の差による性質の違いがある。日本では空気を読むことや謙虚が大切にされているのに対し、ドイツでは積極性が重要視される。会話を例に挙げると、日本では人の話を聞くことが一般的に好まれ、自分のことばかり話しているとあまりいい顔をされない。一方ドイツでは自分の話をしないと「会話に参加したくないのかな」とみなされてしまい失礼に値する。また、日本は「本音と建前の国」と評されるように、婉曲的な表現を好まれるのに対し、ドイツでは直接的な表現が好まれる。ストレートに伝えてしまうためにしばしば衝突が起こるようだ。だが、きちんと話をすればちゃんと自分の言いたいことがわかってもらえるようにも感じた。そして、ミュンヘンでの生活ではマナーの違いも感じる事ができた。電車を例に挙げると、ドイツでは車内での飲食や通話が許されている。サッカーの試合がある日には電車内で手拍子足拍子をしながら大合唱している。日本では考えられないが、前者に関しては時間を効率良く使えるなと思った。他に外出先でのマナーを挙げると、お手洗いを使った時やレストランなどでサービスを受けた時にチップを支払うことだ。日本ではなじみがない習慣なので初めは戸惑ったが、感謝の気持ちがお金という形で目に見えるためわかりやすいと思う。一方で、両国の間にはそれぞれの歴史から見ても共通点が存在する。かつて、ドイツ人と日本人は農耕民族であったためか、形は違えど思いやりや気遣いが根底に深く根付いていると感じた。例えば、混んでいる電車が駅到着した際に、乗り降りする人のために一度電車から降りて道をあけるところをたくさん見かけた。日本でもよく見る光景だと思った。次に街並みの比較をする。日本では狭い土地を有効に使うために縦に長い建物が多いのに対し、ドイツでは横に長い建物が多く見受けられた。バロック様式の壮麗な建物が多いドイツに対し、地震大国である日本は耐震性に優れた建物が多いと感じる。歴史的建造物や遺産を比較すると、自然の素材を美しいと感じ、大切にしている日本に対し、ドイツでは人工物の美しさを突きつめていると感じた。私が特に驚いたのは、ドイツでは芸術がより身近に感じられる、日本よりも寛容であるということだ。日本では考えられないような安い値段で美術館やコンサート、ライブに行くことができる。マリエン広場では毎日のように路上ライブが行われている。ライフワークバランスが上手く保たれているように感じた。個人的には、ミュンヘンの路線が集結する中央駅、おしゃれなお店が立ち並ぶマリエン広場、郊外にあるが大きなショッピングモールがあるパーキングは、日本でいう東京駅、新宿、池袋または越谷レイクタウンのようだった。食事の味付けは、日本人が比較的なじみやすいものであった。油っこすぎず、味付けもちょうど良く感じた。しかし道中ドイツで見かけた日本食のお店のメニューの中には、手日本では見ない巻き寿司の具材もあった。なかでもマンゴーとクリームチーズが巻かれた商品があったのは驚いた。実際食べてみると意外とお米との相性が良く、さらに驚いた。かつて日本人があんぱんを発明した時もこのような感じだったのだろうかと思った。食膨の量は日本よりも多く感じた。食べ物が全体的に日本のものより大きかった。外食で使う費用は日本より少し割高であった。恐らく税串の筈であろう。最後に、ドイツに滞在している間、充実していたものの心身共にゆったりできたように感じた。自国にいる時は気が付かなかったが、旧本ではせかせかと慌ただしい空気が流れていたのだと初めて気づく事ができた。







## 成果は数字で測れない

報告書の中に、学生たちが強く感じ取っている「世界の中の日本」についてこう述べている。

「グローバル化が進み、日本にしながら世界と繋がるのが容易になった今だからこそ、外国に行く必要がなくなったのではなく、むしろ実際に行ってみて自らの目を見たことを、自分自身で考えることがとても重要になってくるのではないかと思う。井の中の蛙になってはもったいない。」「日本の歴史からも分かる。島国だから、ということを使い訳に、なかなか世界と触れ合おうと行動してこなかった自分が、結局はすごく日本人らしいと思った。日本のことは好きであり、日本人らしい自分も好きだが、今回の経験を通して、もっと日本を知るべきだと感じ、さらに考えるだけでなく行動し世界に触れたいと思った。」彼らの言葉ですべてを語っているように思われる。外向的になれずに「内向化」になりつつある大学生たちが多く中で、このような気持ちを少しでもファシリテートできたなら、私達、国際教育を担当する者としては、今後の学生に示すべき操舵は自ずと預けられたのではないかと思う。

今後とも、きっかけをすること、学生自らに気づきと発見を大切にプログラムの推進に邁進したいと考えている。

名前 ミュンヘン大学語学研修 2015

住所 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

大正大学

教務部学修支援課

国際

電話番号: 03-5394-3039

FAX 番号: 03-3918-9179

電子メール: kokusai@mail.tais.ac.jjp

